

時代と共に 変化する千波湖

地図を作る動機

千波湖畔にはダイダラボウのことが書いてある石碑があります。内容を要約するとダイダラボウという巨人が千波湖を作ったと説明がありました。ダイダラボウは想像の巨人としても千波湖は人造の湖なのかと疑問を持ち、たこが地図作りのきっかけとなりました。実際に調べると千波湖は時代と共に変化してきた歴史ある存在ということが分かり、他の人にも千波湖がどのように変化してきたかを伝えたくて次のとおりまとめてみました。



千波湖はもともと那珂川の氾濫などでできたもので上市台地と緑岡台地間の低湿地帯に生じた沼と考えられています。江戸時代初期には水戸藩の城下町建設により堀として利用され左図のような千波湖が形成されました。当時の千波湖は過去の文献によると大きさが現在の3.8倍もあ、たとされています。なお左半分を上沼、右半分を下沼と呼んでいたそうです。



明治2年に水戸鉄道が開通したことで水戸の市街化を目的とした千波湖の埋め立てが計画されました。しかし、埋め立ての協議は難航し実現には至りませんでした。しかし大正初期には荒廃などの問題が目立つようになり下沼部分の埋め立てを行い現在の大きさとなりました。左図は戦後すぐ撮影されたもので食糧不足から水田として利用していることが分かるものです。



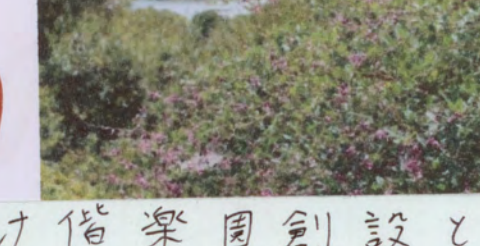



現在は遊歩道に囲まれ散歩やランニングをする人で賑わっている千波湖ですが昭和43年に開園した偕楽園レイクランドの存在は自分達には知らないものでした。ジェットコースターや観覧車もあったそうですが昭和60年に閉園したそう。現在は千波公園となり各種イベントで使用される広場となっています。白鳥横断注意の標識もあり千波湖の優しさを感じられます。

現在の千波湖でのイベント

まとめ

この調査を通して、千波湖は江戸時代には水戸城の堀として利用され、明治・大正には市街化を目的とした埋め立てが行われ、戦後は食糧不足を補うため水田として利用されました。そして現在は市民の憩いの場として利用されています。このように時代と共に人の手によって変化してきた千波湖を今回の地図作りで学ぶことができました。最後に、これまで変化し続けてきた千波湖ですから、これからも時代に合わせて変化を続けると思います。僕達は千波湖を見守り決して環境汚染などで悲しい変化をさせないよう努力して子孫に受け継がなければならないと思いました。

<h3>春 水戸の梅まつり</h3>  <p>偕楽園は1842年に徳川齊昭公が開設したもので、園内には100品種300本の梅が植えられ、2月～3月には全国から大勢の観光客が訪れています。また梅まつり期間中の日曜日は観梅デーとして梅杏の下で水戸黄門一行などと写真サービスが行われています。</p>	<h3>夏 水戸黄門まつり</h3>  <p>水戸黄門まつりは、昭和36年に始まり、たまつり、毎年8月の第1金・土・日の3日間開催されています。まつり期間中には約450発の花火が千波湖で打ち上げられます。また、山車巡行、水戸黄門パレードなどのイベントが開催されています。</p>
<h3>秋 水戸の萩まつり</h3>  <p>伊達藩から譲り受け偕楽園創設とともに園内に植えたもので宮城の萩を中心に750株が咲き競います。「中秋の名月」には偕楽園を夜9時まで特別開放し秋の風情を感じられる「月見の会」が開催されます。</p>	<h3>冬 元旦マラソン</h3>  <p>元旦マラソンは、毎年新春恒例のイベントとして、千波湖を1周するマラソン大会です。コースの全長は約3kmで市民ランナー約250人が、毎年走り初めを楽しんでいます。</p>